

心理学と読書

文学部教授 横山 博

世紀末から 21 世紀を迎えるにあたり、世相は相当混乱している。バブル崩壊後長引く不況、それが誘因と見られる中高年の自殺の増加、政治の混迷、15 万人といわれる不登校者、そして何よりも人々を驚愕、困惑させている少年の犯罪の増加などなど、挙げていけばきりが無い。このような世相を反映し、ここ数年来、かつてないほどに心理学ブームが起きている。人間科学科で臨床心理学を担当するものとして、こんなにもたくさんの方が人間のこころというものに興味を持ってくださることはありがたいことなのではあるが、この現象は本当に喜ばしいことなのであろうか。教える当事者としてはいささか危惧の念を禁じ得ないのである。このことについての筆者の心配について少し考えてみたい。

古来人間のこころは謎に満ちていて、その多様な現れは、ギリシア神話、日本神話などを初めとして、その後積み重ねられる営々たる文学や他の芸術の歴史のなかで表現されてきた。しかしそれでも人間のこころの謎は汲み尽くされることなく、われわれは少年たちが起こす事件の前で、そしてまだ続く戦争という殺戮の前で立ち往生しているのである。

何故あの少年が人を殺さなくてはならないのか、何故この少年、少女が学校へ行かないという行動をとるのか、われわれはすぐにでも答えが得られないかと期待する。その期待が、今の心理学ブームの第一の要因ではなかろうか。われわれのこころのなかのどこかに「学」とつけば何でも回答を与えてくれるのではという気持ちが宿っていないであろうか。残念ながらしかし、心理学はそんなに明解な回答を与えてくれる学問ではない。というより心理学で現在語れる以上に人間のこころとは不可解なものと言った方がより正確かもしれない。第二には今の世相は自分が何者であるのか、自分がどんな成人になっていったらよいのか、極めて不鮮明な時代であることが、心理学を求める人を多くしているのではなかろうか。しかしこれにもまた心理学は直接的な回答を与えてくれない。たかだかこころの枠組みを学び、その基礎を与えてくれるのみであろう。

とすれば人間のこころの理解、自分の同一性の在り方をどこに求めるべきなのか。筆者はここにこそ文学、哲学、そしてその他の芸術の意味があると思っている。例えば樋口一葉の『たけくらべ』なる小品のなかで、一人の少女が恋を芽生えさせることにより、おてんば少女から恥じらいのある娘への変容がいかに見事に描かれていることか。また青年期における性欲も含む衝動性と傷つきやすさ、どうしようもないその心性の在り方を、中上健次の『十八歳、海へ』がいかに切なく伝えていることか。

青年期とは大人としての自分の同一性、そして顔を作っていく時期である。どんな大人になるかが困難な時期で、自分の顔が自分にぴったりしているかどうかを疑ったことのない人の方がむしろ少ないのではなかろうか。そんな人たちに、太宰治の『人間失格』や三島由紀夫の『仮面の告白』はいかに読まれるであろうか。2人とも自殺に終わっているのだが、人間が自分の顔を作ることはかようにしんどい作業なのである。

かくの如く、例えば文学とは人間の心的現象の多様性の宝庫なのである。心理学というある意味でコンパクトになった「学」に何か回答を求めるのではなく、その人に合った心的事象を表す文学のなかを彷徨して欲しい。そして自分なりの生き方や世相の見方を見つけ出して欲しい。残念ながら心理学は、自分の生き方や身の周りに起こる理解し難い事象、さらには世の中の現象にコンパクトに回答を与える学問ではない。

これまであたかも心理学が役にたたないかのような印象を与える書き方をしてきたが、それは筆者の真意ではない。要は $1 + 1 = 2$ であるという物の分かり方を心理学に期待しても無理だということなのであって、心理学的知識があつて初めて理解可能になる文学作品も多い。そうした作品の多くは人間の無意識の問題を扱っていて、人間のこころのなかに無意識があり、心的事象として霊的世界をも含んでいることを理解していないと分かりにくい。カフカ、阿部公房、吉本バナナの世界などがそうであり、人間の持つ不条理性、不可解性を示している。文学ではないが、絵画のピカソやシャガール、ダリの世界なども夢という無意識の世界の存在を知らないと理解しにくい面もあるし、心理学がそのきっかけを作ってくれることも多々ある。しかしこれらの芸術作品は無意識の層に直接訴えかけ感動を生むのであり、心理学的素養が必ず必要という訳ではない。

結論的に、人間のこころとは安易に分かるものだと思うのではなく、ともかく文学やその他哲学などの世界をさまよってみよう。図書館とはそうしたものの宝庫なのである。